

## 信州読書会 ツイキャス読書会

### 課題図書 G・ガルシア=マルケス 『予告された殺人の記録』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 64 回のツイキャス読書会の課題図書は、G・ガルシア=マルケス 『予告された殺人の記録』です。  
読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 名誉殺人という謎

南米、あるいはスペイン語圏の小説はあまり読んでいないので、今回の読書会を機にじっくり読むことができ、良かった。マルケスの「百年の孤独」は昔挑戦したが、登場人物の名前が覚えられなくて、途中で諦めた記憶がある。今回も色んな人物が出てくる小説だったので結構苦労したが、無事最後まで読み通せた。

この小説は実話を元に作り上げた、ノンフィクションとも言える小説である。ある男が殺害されるまでの過程を淡々と語ってゆく。こういう文章は普通味気ない文章になりがちだが、不思議にも詩的なリズムを持っている。男が殺される場面も随分猟奇的な描写を施しているにも関わらず、ユーモラスで淡白な筆致で綴られているのが面白い。

名誉殺人と言えば、イスラム系の国から女性が親族に殺される場面が最初に頭に浮かぶ。だからこの小説で不貞を犯した妹ではなく、妹の処女を奪った男性を殺したことから興味を感じた。やはり文化の違いの故だろうか。

この小説の名前通り、この殺人事件は予告され、十分に未然に防げられたものであった。しかし、村の住民たちはその予告を信じないか、殺されるても当然だと言う姿勢を取った。閉ざされた村社会の暗黙のルールがあるのである。そのルールは被害者のサンティアゴ本人も逃れられないものであった。まるで皆それを約束したように殺人は起こり、住民たちはさほど驚かず遠い日のことのように扱うようになる。

殺害者のふたりの男性が司祭の前で話した、「私たちに罪はありません」という言葉が胸にしみるほど衝撃だった。人は名誉を回復するためには、道徳を捨てても価値のあるものだと考えてしまうのだろうか。短い小説だけど、その内容や主題意識は決して短い文章で収められない気がした。

(おわり)

## 『不憫な兄弟』

私は、どんな状況でも殺人を犯してしまうという事に同情とかありませんが、ビカリオ兄弟はすごく可哀想に思いました。

妹の名誉の為に、サンティアゴ・ナサールを殺すと宣言して、でも普通殺人なんてことは許されるはずもないし、計画を誰かに打ち明けたらすれば、きっと止められたり、阻まれたりして実行されるのは不可能のように思われるけれど、誰も力づくで止めてくれるひと居なくて、止めさせようとしていたのは力の弱い女性だけだし、やらないといけない雰囲気にはされているように思いました。

パブロ・ビカリオの許嫁なんかは、サンティアゴ・ナサールを殺すことが名誉のように思っていて、パブロも殺人の計画を止めるという選択肢が閉ざされた感じで気の毒に思いました。

私の読み間違いかもしれませんが、兄弟同士でも、どちらかが止めようって言ってくれないかな？ と何処かで期待しているような、感じもしました。

それと、双子だからかもしれませんが、兄弟の関係が少し変で、兄は軍隊に行った弟に少し引け目を感じていて、立場的に弱い感じだから、最初は弟が殺人を持ち出してそれに兄が従う感じだったけど、途中で弟の持病が悪化してきて、兄がこれをきっかけに主導権を握ろうとしているようにも思いました。

もし、双子の兄弟じゃなかったらどちらかが、止めようって言ったかもしれないし、男兄弟が居なくて一人で殺人を実行しなきゃいけなかったとしたらやらなかったように思いました。

せいぜいボコボコにするぐらいかな？

ビカリオ兄弟は、この殺人の計画を実行しないと自分達の居場所が無くなってしまふようなそんな感じもしました。

分からなかった所は、どうして手紙は読まれる事は無かったのか不思議でした。誰かが隠してしまったのでしょうか？…。

(おわり)

## 「亡骸について」

この感想はかなり個人的なものです。また、話の本筋からずれています。ただ、私が読んで一番気になったことです。

それは、題に書いてあるようにかなり言いにくい話題です。話の中ではこの描写が解剖時の前後や犯行後の臭いなどに詳しく書いてあります。

その記述は、衝撃的で、怖ろしい内容でした。私は、過去に3人、身内の看取りを経験しています。看護師さんや葬儀屋の人と、一緒に清拭をして、死装束を着せて化粧をしました。消毒、ドライアイス、詰め物のおかげで、顔も身体も美しくして頂きました。けれども何もしないと、あっという間に腐敗が進むのですね。多少はあると思ってはいましたが、ここまでひどいとは思っていませんでした。病院での処置や葬儀屋さんのシステムが整っている日本ならではの有難い結果だと知りました。

そして、この事を知った私は、社会で起きている2つの状況に考えが及び、大きな憂いを抱きました。

1 つ目の憂いはシステムが機能しない場合の状況についてです。大震災など多くの死者が犠牲になり処置が不可能、或いは遅れた場合です。

戦時中も当然そうだったはずですが。現在も日本ではこの様な状況は起きているし、世界を見渡せば毎日どこかで起きています。システム自体がまだ作られていない国ではその状況は深刻でしょう。私たちがニュースで知るのとは、亡くなった人数や、亡くなった理由、既に腐敗は終わった後の状態の話で、死の直後の様子や腐敗のことは伝えられません。限られた関係者しか分からない、見えない悲惨な時間があることに心が痛みました。私は、人が亡くなった時はそこまで想像を広げた上で遺族の気持ちを考えることが必要だと思いました。

もう一つの憂いはシステムが機能しているのに亡骸を放置する人がいることです。亡骸と一緒に白骨化するまで一緒に暮らしていた人の事件が時々報道されます。私は今まで経済的理由や別離を悲しんだ余り、やむを得ず一緒にいたのだらうと思っていましたが考えが変わりました。亡くなった人を大切に思っているなら、人間の良心を持っているなら、どんどん進んでいく腐敗を身近で目にしながら耐えられるはずがありません。腐敗の黙認は、死者の人権無視ではないかと私は、思います。

(おわり)

## 鳥は空から見ていた

夢判断をしている母がいて、犬がウサギの内臓を生で食べ、司教は鶏冠のスープが好物。  
そこまで読んで、古い因習にとらわれた前時代的な町が舞台。土着的な土地の民話のはじまりだと思った。  
はじめから殺人が起こることを知りながら読み進めてゆくうちに、  
殺した側は、本当は誰かに必死に止めてもらいたかったことがわかる。  
殺される側も、直前に自分が狙われていると知らされながら  
ふらふらと広場へ出てゆき、予告を聞いた者がこれから起きる殺人現場に集まっている。

マルケスは、この小説を書くために実際の事件があった町を何度も訪ねたそうだ。  
中身はゴシップ。俗っぽい噂はいつまでも途切れず、暗雲と立ちこめていただろうと思う。

(引用はじめ)

何年もの間、わたしたちの話すことはほかにはなかった。連綿と続いてきた数多くの習慣にそのときまで従っていた我々の日々の行ないは、突如として、共通の不安を中心に回り始めた。夜明けに鶏がときを上げるが早いか、わたしたちは、あの不合理な事件を可能にした、互いにつながり合った無数の偶然に、秩序を与えようと努めた。言うまでもないが、わたしたちがそうしたのは、いくつものミステリーを明らかにしたかったからではない。そうではなく、宿命が彼に名指しで与えた場所と任務がなんだったのか、それがきちんと分からぬまま暮していくことは、わたしたちにとって不可能だったからである。(新潮文庫 114p)

(引用おわり)

町は、変わりたくなかった。  
アラブの血も近代化の鉄道も、心の底では望んでいなかった。  
そして、司祭は船から降りなかったのだから、神からも見離された。

町の共同体という塊がそうさせたとしたら……神が決めた宿命にはあらがえない上に民衆の気持ちが裏付けされているから、その命は偶然の重なりと名誉を重んじるという口実のもと、消されることを望まれた。

夢判断の鳥は、サンティアゴ・ナサールを糞まみれにし不吉を知らせ、それが町の人声なき声なのだを教えている。小説の事件は事実だったからこそ、リアリティを伴っておそろしい。だけど真実は明かされないままだ。町の人には神への信仰よりももっと根深い土着的なものに引っ張られていたように思えた。それが何なのかはまだわからないけれど、マルケスの他の作品も読んで、中南米の国々が持つ光と影をもっと深く知りたいと思った。

(おわり)

## 偶然か宿命か

この小説は最後まで読んでまた最初にもどり、また読むでは戻りたくなる。ぐるぐると終わりがどこかわからない不思議な感覚になる物語だった。読むスピードが早まるほどに私にとって遠い国であるラテンの熱気と鮮やかな色彩が脳内に広がっていった。

しかし何度読んでも疑問は増えるばかりだった。本当にアンヘラを辱しめたのがサンディアゴだったのか、何故彼が殺される人に選ばれたのか。そしてそれが知りたくてまた読み返してみたくなる。

「彼は私の命でした。」サンディアゴの母は言った。

「ならず者、ろくでもないことしかできない、畜生めが。」サンディアゴの教母は呟いた。

サンディアゴを本当に助けたいと思っていたのはサンディアゴの実の母と先礼のときの教母である筆者の母ではないかと思う。

しかし、サンディアゴの実の母は息子の見た夢を占う事が出来なかったし、教母は秘密の情報網をもちながら、サンディアゴを助けることが出来なかった。

街の人々は言う。「止めようとした。でも止められなかった。」

殺人した双子の兄弟は言う。「殺したくて殺したのではない名誉のためにやらざるをえなかった。阻む人をさがしていた。誰もとめなかった。」

十分に予測できたにもかかわらず殺人はおこってしまった。

民衆の言動の裏側にあるけして表面にはださない憎悪の感情が司祭のお祭りと婚礼の熱狂の空気感の中で偶然が重なり殺人を引き起こしてしまったのだろうか。

真実は明らかではないが、事件は偶然ではなく街の人々はサンディアゴが殺されるシナリオの結末を知りながら、自分の役割をただ演じただけの役者にすぎないのではないかと思った。

偶然としか思えない出来事を重ねながらも最後はやはり宿命ではないかと思わせる小説だった。

(おわり)

## 『予告された殺人の記録』を読んで

今回初めて手に取り、二回通読いたしました。最終章でナサールが刺し殺され、腸が飛び出しながら、歩いて自宅内に倒れ、死ぬまでの描写がかなり凄惨で、読後には暫く沈鬱さや、胸のあたりに不快さが続いてしまいました。ガルシア・マルケスの筆の力でしょう。

さて、私が一番興味を持ったのはアンヘラ・ビカリオの人間的变化(成長)です。彼女が返事の来ないラブレターを十七年間も書き続けたことは謎ですが、さらにその間の彼女が「人生の意味を理解し」「成長し賢くなっていた」ことがその片思いをしたお陰のように書かれていたことが最大の謎でした。そのようなありふれて見える片思いの、何がどう彼女に影響し、変化させたのかを、ガルシア・マルケスにもっと語って欲しいと感じました。なぜならば、キルケゴールの「女性は献身を通して神との関係に入る」との言葉を私なりに探求している最中だからです。

キルケゴールの言う「献身」とは、女性が自分の能力(主に抽象的な理論を扱うことや、共同体をリードしていく分野?)では至れない様な知性や権力、人間性などを持つ誰かに、畏怖や尊敬の念を認め、自分より大きな存在として自分より上に掲げ、崇めたり憧れたり目標にしたり、さらには自分では成し遂げられない事柄に関しては、献身相手が成し遂げてゆくのを応援したりすることなのではないでしょうか。アンヘラはバイルド・サン・ロマンにそれを感じたのでしょうか。その様に立派な人物として彼は描かれていなかったようですし、彼と彼女の付き合いはほとんど結婚式とその夜の数時間のみでしたから、彼女が長きに渡り彼に恋をし続けたことがとても不可解に思えます。ここでもキルケゴールの言う「献身相手を選ぶために女性に備わった直感」が働いたということでしょうか。仮にこの片思いが「献身」にあたるなら、彼女の成長に、具体的に恋の何がどのように影響し彼女に人生を発見させたのかということが私には最大の謎となっております。

(おわり)

## 『 神のまにまに 』

サンティアゴ・ナサールは、確かに「死」に誘われていた。大々的に予告されていたのにも関わらず、逃れられなかった。ただ、偶然の連なりの果てに起こったことではないという読後感を追い求めたい気持ちになった。

サンティアゴは、惨殺された後の胃の内容物から、カルメル聖母像の金のメダルが出てきた。カルメル聖母像は茶色のスカプラリオという修道服を身に着けており、それを身に着けるものは自分自身の全てを彼女の保護に任せる忠実な支持者であるらしい。スカプラリオの画像には、金のメダルもあった。彼はそれを飲み込んだ4歳の時から、知らずにして神の傍にいたのかもしれない。

彼自身、全く業がないわけではない。賄い婦のビクトリアは、サンティアゴの父に慰み者にされた系譜から、娘のディビナ・フロールには同じ目に遭わせたくない。だが、その兆候は顕れている。牧場経営が成功し金持ちではあるが、アラブ系の父を持つために、どこか差別感情が周囲の民衆の心に巣食っていたのかもしれない。「異邦人」のムルソーが、アラブ人に説明のつかない銃弾を4発も浴びせたことに似ているかもしれない。

田舎町の共同体の中で、どこか危ういバランスでナサール家は生活していたのだろう。

ところが、バヤルド・サン・ロマンという異分子が町に加わってから、そのバランスは崩れたのだ。彼の人生の因果を一掃するかのごとく、サンティアゴは「死」へと近づいていく。一方からみれば「偶然」かもしれないが、神の意志が要所で繰り返されるのだ。司教が寄港しなかったことしかり、アマドール神父が本人への忠告を忘れてしまうことしかりだ。もちろん、それに田舎町のいびつな感情も複雑に絡んでいる。

しかし、サンティエゴは金のメダルを飲み込んでいた。神の忠実な支持者であるのにも関わらず、彼はビクトリアが捌いていたウサギと同じように臓物を飛び出させながら死んだ。それは、サンティエゴの父からの因果を清算させるための神の意志だと考えるのは穿った見方すぎるだろうか。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>



「ビクトリア・グスマンが兎の蔵物を犬に投げた時、すべてがはじまった。それは、まさしく神のお告げだった。」

この村の人達は、心の奥底で、バヤルド・サン・ロマンをよく思っていなかった。政治的には保守的な背景を持つバヤルド一家を、左派のこの村の住人はどこかで恨んでいる。

サンティアゴ・ナサールもアラブ系の移民の成金として、やはりどこかで疎まれていた。

司教が、上陸していれば、殺人は起こらなかつたらう。主権者たる住民の一般意志は、バヤルドとサンティアゴが同時に無くなる偶然を望んでいた。神の意志は、司教が上陸して殺人を止めるか、見過ごして過ぎ去るかのどちらかだ。司教は、この街に寄らなかつた。ミサは中止になった。見かけばかりの祝福をして立ち去った。寄らないことで殺人と共同体との間に、默契が出来上がってしまった。予告された殺人は実行された。誰も止めなかつた。誰もが共犯者だった。

アンヘラは、事件の後にバヤルドを深く愛するようになった。『男性は意志の保持者であり女性は、人類の知性の保持者である。』とショウペンハウエルはいうが、自己を見失っていたアンヘラはバヤルドを愛し始めて、初めて自分自身になった不幸な結婚によってはじめて彼女の知性は、いきいきと働きだし、2000 通のラブレターとなって結実した。

『女性の本質は献身なのである』『献身において女性は自己自身である。かくてのみ彼女は幸福でありかくてのみ彼女は自分自身である』(キルケゴール『死に至る病』)

アンヘラは誰をかばったのか？ 彼女の処女を奪った真犯人は誰か？

サンティアゴの親友だったクリスト・ベドヤがどうも怪しい。次点で、語り手の私も。しかし、アンヘラは、無実のサンティアゴを告発した。

女性が性的被害を告発する「#metto」運動の危うさはここにある。女性の性的被害の証言が政治的謀略に使われると、無実の人間が失脚する可能性がある。立場の弱い女性は深く思い込めば、誰かのために誰かを犠牲にするのも厭わないかもしれない。「名誉と愛は同じものよ」これも、言い訳だ。女性たちの知性に、男性の意志が合わさって、殺人は実行された。神の意志によって正当化され、共同体は持続する。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)  
今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)